九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

國見攷

高木, 市之助

https://doi.org/10.15017/2556572

出版情報：文學研究. 30, pp.15-26, 1941-12-25. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

國見攷

高木市之助

一

國見は古代史のそこ〻に散見する普通語で、決して文學上の專用語ではないが、本稿に限り、聊か術語扱ひにして、この言葉の特に文學史的な意味を討ねて行く事により、我が上代文學の多少の性格を明かにして見たいと思ふのであるが――

尤も上代に於て、文學の世界は現實生活のそれから遊離抽象された特殊の美的或は藝術的構造を有つてゐるのではなく、兩者は表裏相即してゐるのであるから、この場合文學的な意味といつても、畢竟は日常生活に於ける或慣行の表現關係以外の何物でもない。そこでまづかうした上代生活に於ける一つの習慣乃至行事としての國見とは凡そどのやうなものであつたか。一體人間が高處に登臨して山川鄕土を展望するといふ事は、酷寒とか苦熱とか、又は沙漠とか山岳地帶とか、季節や地勢の條件を負はない限り、時處を超えて普遍的な行樂ではないかと想像されるのである。唯近代の生活に於ては文化の向上につれてかうした比較的素樸な行樂面が蓋はれてゐるいふに過ぎないであらう。例へば支那古代の文學を漁つてみても、之に類した慣行は隨所に認められるやうで、例へば楚辭に「登大墳以遠望兮、聊以舒吾憂心」などとあるのを始め、文選に於ても謝禮運、顏延之、沈約等代表的作家の詩などには屢〻瞻眺の感慨が

抒べられてゐる。我が國に於ける國見といふ事も所詮はかうした人類に普遍な行爲に通ずるのであるが、同時に又傳播とか模倣とかいふ直接の關係があるわけでもなく、そこには自ら歴史や風土を反映する特殊の性格を有つ事になつたでもあらうと思はれる。これは國見といふ言葉自體に一向大陸のにほひがなく、いかにも日本人が自分自身で慥へたといつたかたちである事によつても明かであるが、更に國見といふ行爲がどんなに我が上代人の生活に喰込んで、我が國獨自の性格を有つに至つたかといふ事は、それが國見丘とか國見山とか、乃至は國見とかいふ山名或は人名になつて諸國又は諸文獻に遺つてゐる事によつても略ゞ想見出來、隨つて「高きところより國内を見渡すを古へに國見といふ」といふ記傳の説明もかうした獨自の性格を指摘し得ないといふ點で、必ずしも十分とは言へないのである。

それでは普遍的一般的な登臨の風習から、特に日本的な國見を別つものは何であるか、換言すれば、吾々は上述記傳式の説明をどのやうに補足すべきであるか、本稿當面の問題、即ち上代文學に於ける國見の意味といふ事も畢竟かうした課題に對する比較的立入つた一つの解釋に外ならないであらう。

二

さて上代文學に於て國見はどのやうな意味を有つてゐたであらうか、今假りに國見を主題とする歌や歌謡を國見歌とでも名づけるなら、吾々は次の諸歌にかうした國見歌の不完全且素樸な實例を窺ふ事が出來よう。

〔例一〕淤志弖流夜　那邇波能佐岐用
　　おしてるや　難波の埼よ

伊傳多知弖　和賀久邇美禮婆
　　出で立ちて　我が國見れば

阿婆志麻　淤能碁呂志摩
淡島　おのごろじま

阿遲麻佐能　志麻母美由
檳榔の　島も見ゆ

佐氣都志麻美由
さけつ島見ゆ

（古事記、仁德天皇御製）

〔例二〕

野麻登陛儛　瀰我保指母能婆
倭邊に　見が欲しものは

於尸農瀰能　莒能陀智紀儺屢
忍海の　此の高城なる

都奴婆之能瀰野
角刺の宮

（日本書紀、當世詞人）

〔例三〕

擧暮利矩能　播都制能野麿播
隱り國の　泊瀨の山は

伊底拖智能　與慮斯企野麿
出で立ちの　宜しき山

和斯里底能　與慮斯企夜麿能
走り出の　宜しき山の

據暮利矩能　播都制能夜麻播
隱り國の　泊瀨の山は

阿野儛于羅虞波斯
あやにうらぐはし

阿野爾于羅虞波斯　（日本書紀、雄略天皇）
あやにうらぐはし

今是等の諸歌を、一應所傳から解放してみるに、〔例一〕は高所からの眺望ではなく、海上或は海路の風景であるが、しかもそこにあるものは作者の單なる自然への感懷ではない。なぜなら「我が國見れば」といふ言葉は簡單ながら既に所謂國見への第一歩を踏み出してゐるのであつて、隨つて次に來る島々への情感も亦、淡々たるながらに「わが」の薫染を受けて自己の鄉土愛への斷ちがたい羈絆に結ばれてゐる「我が國」として見渡された島々だからである。〔例二〕に於ける對象は國ではなくて宮であるが、「この高城」のこのには〔例一〕の「わが」に通ずる鄉土愛の感情がほの見え、さうして（忍海の―（高城の―（角刺の―と段々小さくしぼつて行つた焦點なる宮が倭邊といふ大きな地域の誇りとして讃美されてゐるところに、吾々はやはり或鄉土意識をしみ〴〵と感ぜざるを得ないであらう。〔例三〕は泊瀨の山のうらぐはしさに終始する歌であるが、さうして作者の位置が漠然としてゐて、必ずしも高所から自分の鄉土を見渡したといふのではないかも知れないが、しかもこの山に「隱り國の」と序し、「走り出のよろしき山」と修飾してゐるのを見れば、鄉土愛と全然無關係な自然ではなく、そこに作者が見てゐる者は畢竟「國見」に係る何ものかであらう。（「走り出のよろしき山」といふ句を私は人麿の挽歌の「走り出の堤に立てる」などから推して、門口に走り出た場合などに美しく感ぜられる山といふ風に解したい）要するに是等の歌は眞の國見歌にはまだなりきつてゐないが、謂はば國見を胚胎してゐる點に於て相通ずる一類を成して居り、隨つて吾々が上代文學の世界に國見を索めようとする場合には不可欠の資料なのである。

さて併し、もつと純粋に、或は完全に國見を主題とする眞の所謂國見歌に値する歌を探す事は極めて困難である。

〔例四〕知　婆　能　加　豆　怒　袁　美　禮　婆
千　葉　の　葛　野　を　見　れ　ば
毛　々　知　陀　流　夜　邇　波　母　美　由
百　千　足　る　家　庭　も　見　ゆ
久邇能富母美由
國の秀も見ゆ　（古事記、應神天皇御製）

本歌は後述のやうに、本來國見の意味を有つ歌であるが、更にもし記紀の所傳に隨つて考へるならば、〔例五〕と同じく略〻國見せす大君の御製たるに叶ふ一例になりさうである。所傳に隨へばこれは應神天皇が大和から近江に幸し給ふ砌、宇遲（紀は菟道）野の上に（紀は「ほとり」と訓みならはしてゐる）立たして（紀は至りて）詠みたまうた御製といふ事になつてゐる。紀のかうした說明に對して敷田年治の標注は山城志に據つて宇治野から葛野を「見ゆべくもあらず」と難じてゐるが、記紀の編著者の住地からほど遠くもないこのあたりの地理の事であるから、少くとも記紀成立の時代としては、宇遲（菟道）野から加（伽）豆怒を見ることは「見ゆべくもあら」ぬ事ではなかつたであらう。尤も記によれば「越幸近淡海國之時」と越の字があり、この場面は恰も雄略記に天皇が日下に坐す大后を、訪れさせ給ふ時の「自日下之直越道、幸行河內、爾登山上望國內者、」とあるのを想はしめ、この御立たしたまうた「宇遲野上」が何となく山がゝつた高原らしく想像されるのであつて、さうなると天皇がこの高地から平蕪を見遙したまふ大御姿には一層「國見せす大君」を彷彿せしめるのである。即ち本歌は少くとも所傳に隨ふ限り、略〻明かに天皇

の御國見歌と解する事が出來よう。

〔例五〕　天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭　村山有等　取與呂布　天乃香具山　騰立　國見乎爲者

國原波　煙立龍（籠）

海原波　加萬目立多都

怜何國曾　蜻島　八間跡能國者　（萬葉集卷一、訓は山田孝雄氏に從ふ）

本歌が舒明天皇の國見し給ふ御製である事は題詞によつて明かであつて（題詞に望國をクニミと訓むのは勿論歌詞に「國見乎爲者」とあるによるもので疑ふ餘地はない）しかも歌の內容は國見そのものに係るのであるから、この御製こそ最も嚴密な意味に於て國見を主題とする典型的な國見歌であらう。

尤も萬葉の歌の中には、諸所に「くにみ」といふ言葉が見え、その都度吾々は萬葉人の國見に寄せる感慨乃至關心を、多少とも受容する事が出來るが、唯多くの場合、國見は歌の主題ではないから、さうした場合のこの言葉の意味は文學的にまとまつた、或は獨立した一つの意味ではなく、むしろ補足的或は副次的に他のもつと大きな意味に參加してゐるに過ぎない。例へば〔例六〕卷三（三八二）登筑波岳丹比眞人國人作歌に於て

（上略）　朋（明）神之　貴山乃

儕立乃　見來石山跡
神代從　人之言嗣　國見爲　筑羽乃山矣　（下略）

とある國見にしても、この作者が雪消する山道をなづみつゝ登山したのは、一つには東國に高山がさはにあるにも係らず特にこの山が人々の國見するところなればこそであつて、この意味に於て國見といふ言葉が單に説明語として無表現に扱はれてゐるのではない。併しながら又吾々はこの歌の國見によつて作者國人の國見に寄せる謂はば全き意味（勿論文學としての）を酌みとる事は不可能である。なぜなら、本歌の主題は要するに人々の國見しさうにもないこの寒空に雪消の道を冒して强行する作者の筑波山に對する謂はば國見ならざる他の體驗に係り、國見は單にこの主題を扶ける爲の一役を買つてゐるに過きないからである。つまりこゝには國見の全き意味はない。

〔例七〕　雨間開而　國見毛將無乎　故郷之　花橘者　散家牟可聞　（卷十―一九七一）

同樣のことはかうした歌にも言へる事で、そこに吾々は花橘を點綴した故郷の展望を一應國見の內容として受容出來るにも係らず、それは畢竟はこの歌の裏にある一つの意味に過ぎず、作者にとつて失はれた樂園、逃げ去つたまぼろしにすぎず、それだけに作者の現體驗としての國見からは遠ざかつてゐるのである。要するに萬葉所收歌のところ〳〵に出て來る國見といふ言葉は、謂はばことの序に感じ及んだまでであつて、眞正面から國見を體驗し、之を主題とする私の所謂國見歌に比べれば、その意味は間接乃至不完全である事を免かれないであらう。尤も國見の文學史的意味を考へる場合、こゝにも色々の示唆を求めるべきである事は、〔例一〕乃至〔例三〕の場合と同樣であらう。以上は

本稿が國見の文學史的意味を考へる爲に使用し得た乏しい材料とその性質に就てである。

三

さて國見とは凡そどのやうな意味を有つ言葉であらうか。それは國と見とに分解し、二つの語彙の用例を檢討し、更に各々の語原に溯つて出來るかぎり原初的意味を究明するといつたやうな方法では達成されさうにもない。つまりそれ自身一つの究極的單位をなす文學的意味なのである。具體的には、〔例五〕にあつて國見の意味を形成するものは「國原波煙立龍　海原波　加萬目立多都」といふ一聯の對句を核心としなければならぬ。天皇はこの御製に於て天皇の高知らすあきつ島大和の國をうまし國として、即ち美の一存在として體驗し表現し給ふのであるが、かうした美の內容こそはそのまゝ國見の意味でなければならず、具體的には上の國原は云々の一聯に係らなければならないのである。序ながら前揭國の語原へ溯つて行くやうな方法がかうした國見そのものの理會にいかに無力であるかといふ事はこゝでは具體的に指摘し得るので、即ちこの御製では同じ國であつても、國見の國と、國原の國とはその意味を異にして居り、換言すれば國見の國は國原云々と海原云々とを攝取した新しい別ものであつて、隨つてもしかうした關係から抽象遊離した國そのものの觀念的意味に迷ひこむならば、その方法は國見といふ新しい一つの言葉の有つ創造的意味を無視する事に於て重大な過誤を犯す事になるであらう。

それでは國見のまたの名であるこの一聯の對句が表すものは凡そどのやうな文學的な體驗であらうか。勿論それは或自然環境との關聯に於て成立つ事にまちがひはないのであるが、問題はそれが凡そどのやうな自然（この用語には疑義が多い事は周知の事に屬し、私としては別の用語に代へたいけれども、それを說明する煩しさに辟易して姑く本

稿ではこの曖昧な用語を慣用する事にしよう）との、どのやうな關聯に係るかにあるのである。海原は云々の句で海原が埴安の池を指し、香具山の麓に連なるこの池に鷗どもがとび立つさまをかく表現したまうた事には疑義はなさゝうである。一方國原は云々の句は龍の字を流布の舊本に籠としてゐた爲に「たちこめ」といふ訓みが生れ、隨つて上の煙も煙霞の意とする解も生じたのであるが、煙をそのやうに解する事自身は決して誤ではなく、支那の古文學にも例へば文選謝玄暉作遊東田に於て

（上略）尋雲陟累榭　隨山望菌閣
遠樹曖阡阡　生煙紛漠漠

といふ登高の好風景は、いかにも「かすみたちこめ」に當るやうであるが、こゝの煙は「たちたつ」から考へても分るやうに、やはり國原のそここゝから立ち上る民の煙であつて、仁德記に「天皇登高山見四方之國詔之於國中烟不發國皆貧窮」とある眞裏の景象を想見しようとする諸說に隨ふべきであらう。もしさうならば、この句の有つ意味は、煙の立ちのぼる景觀の自然環境的美といふよりもむしろこの炊煙を通して表現されてゐる民の生活、即ち人間的社會的な美に係るものなのであらう。かういふ風に考へて來るとこの一聯が具現してゐる對句的意味は、一方に人間と生活とがあり、他方に自然と景觀があり、兩者が對立といふよりもむしろ渾融してゐるところにあるのであつて、これがやがて本歌に於ける國見の意味ともなり、更に言へば國見が一般に有つ文學的な意味の核心をもなすのではないかと思はれるのである。

略ゝ同樣の事は例四に於ても看取されるのであつて、こゝで對句を構成するものは「百千足る家庭も見ゆ」と「國の

秀も見ゆ」とであるが、「千葉の葛野を見れば」が〔例五〕の場合の「天の香具山登りたち國見をすれば」に照應する以上〔例四〕に於ける國見の意味は當然右の一聯に求められなければならない筈である。そこで「百千足る家庭も見ゆ」の意味を考へてみるに、そこにあるものは發想こそちがへ、民の殷賑多幸な生活に對する天皇の御滿悅感である事は「國原は煙たちたつ」に齊しいであらう。次に「國の秀も見ゆ」は從來の解では國の秀ですぐれたところといふ意味に於て略〻一致し、どのやうに秀ですぐれてゐるかといふ點には諸說に齟齬もあり曖昧でもあるが、もし「海原は鷗立ちたつ」と照應させてみるならば、そこにあるものはそれほど印象的ではなくともとにかく景觀的な或優秀性を指す事にまちがひはなささうである。してみればこゝにも〔例五〕と相通ずるものがあり、そこにある國見の意味も亦素樸ながらも一方に民の社會があり他方に自然の景觀があり、兩者は渾融してゐないまでも、頗る調和的に相關映發してゐるところに求められるべきであらう。

以上は本稿の中心材料たる〔例五〕と〔例四〕とによつて國見といふ言葉の負ふ文學的意味を考へたのであるが、かうした意味は二首以外のもつと不完全な前揭諸材料の中にも求められなくはない。例へば、〔例一〕に於て國見の內容をなすものは無雜作な島々の列擧に過ぎないが、さうした列擧の中にも吾々は稀薄ながらも國見の意味を受容する手がゝりがありはしないか。即ち、四つの島々は島の名それ自體によつて何ものかを表現してゐる事は略〻想像されるのであつて、例へば淤能碁呂島といふ島名はそのまゝ岐美二神の神話を聯想させたであらうし、檳榔の島といへば檳榔生ひ茂る景觀を彷彿させた上代人ではなかつたか。一體この歌の有つ美しさは四つの島々が大小長短とり〴〵に並べられ——といふよりも名乘られて行く一種の表現力にある。

（あ　は　し　ま）四言―（おのごろじま）六言―
（あぢまさのしま）七言―（も　み　ゆ）三言
（さ　け　つ　し　ま）五言―（見　ゆ）二言

四島が四島ともその長さを異にする上に、中間に「の」のテニハがたゞ一つ加つたり、「も見ゆ」「見ゆ」とことさらに斷續したりしてゐる姿は瀬戸内海に於ける遠近大小の島の姿にも似てゐるのであつて、「おのごろじま」と「あぢまさのしま」の關係も謂はばかうした島々の對比の一例にすぎないのであるが、この對比に上述〔例四〕や〔例五〕に於けると同樣の意味を求めてはいけないであらうか。おのごろじまの有つ美しさは神話的即ち神や人に連なり、あぢまさの島のそれが自然環境を豫想せしめてゐるところに、〔例四〕と〔例五〕に於ける、人間と自然、生活と景觀の對比渾融關係におぼろげに應ずる何ものかがあるやうである。又〔例六〕に於て筑波山を「朋神（ともがみ）の貴き山の――儕立（なみたち）の見がほし山」と叙した對句を見ても、この山の同じ姿を、前者は神話的側面から拜跪してゐるに對して、後者は景觀的角度から讃美してゐるのであつて、こゝにも〔例四〕〔例五〕に於ける國見の意味に通ずるものが感ぜられはしないか。

最後にこれまで考へて來たところをもう一歩進める事が許されるならば、そこに吾々はもつと大きな、上代日本文學に於ける人間と自然の關聯から來る、根本的なそれ〴〵の性格に觸れて行く事になるであらう。それは勿論このやうな短文のよく解決し得るところではないが、唯本稿から導き得るさうした性格の一つとしてこゝに再びとりあげて見たい事は〔例五〕に於ける煙と鷗の特に相關緊密な親和の關係である。「煙たちたつ」と「鷗たちたつ」とこのあまり

にも稚拙な對句的表現は、觀方によつてはその故にこそ民のけぶりと自然の鷗との相融け相親しむ一つの美しさに重なりあつてはゐないであらうか。換言すればかうした國見の意味の世界に於て、人間が美しく生きる爲の根本條件として、その自然への同化が要請されると同時に、自然が美しく榮える爲の根本條件として逆にその人間への親和が要請されてゐるのではなからうか。勿論かうした關聯は國見歌乃至之に準ずる諸作に固有な事ではなく、記紀萬葉の世界に於て隨所に感ぜられる事である。例へば「春すぎて夏來るらし白たへの衣ほしたり天の香具山」（萬葉集卷一、持統天皇御製）に於て衣ほしたりと眺めやる自然は人間によつて飽和された自然であり、「我妹子に戀ひつゝあらずは秋萩の咲きて散りぬる花ならましを」（萬葉集卷二、弓削皇子）に於て花ならましをと嘆く人間は自然に浸りきつた人間であるやうなものであり、その故にこそ吾々は上代文學に普遍する根本的な性格としてかうした關聯を確認して行く事が出來るのであるが、唯特に本稿の結語としてこゝに言ひ得る事は、かうした上代日本文學に於ける、人間の自然らしさと自然の人間らしさの相互關聯によつて奏でられる或日本的な美の樣相、それこそそのまゝに、或は他のどのやうなものよりも一層はつきりと理會し得る、國見の意味に外ならぬといふ事である。

因に本稿には、かうした國見の意味をもう一歩進めて考へるだけの用意があつたが俗務に逐はれてその時間を失つた事は遺憾である。（十六、十一、四）